

## 六田の一夜

汀 鷗

朝風めて奈良の宿を出て、汽車にて畝火にゆき神武天皇の御陵を拜す、結ひめぐらせる

玉垣いと物さび、境地砂

白く松青く嚴そかに神々

しく、自から頭下りて、

涙さへおちぬべく思はれぬ。

それより久米寺を過ぎ

ぎ芦原峠にかゝる、峠は

吉野にゆくべく難所の一

にして、上下數里往來の人

極めて稀なり。老鶯の啼

く音に慰められて漸く

頂上に達せし頃一人の道

連れを得たり、この人の

のあたりに住めりと覺

しく、吉野の勝を説くと

極めて詳かに明日山中の花をたづねんとする我には少なからぬ

利便を得たり。今宵は峠の麓なる檜垣本といへるに一泊の心組

なりしが、檜垣本をヒガイモトと呼ふなりとききて其名の忌は

しきに心進まれば寄らて過しつ、景色よき川に沿ふて溯ること



カツカシノ筆臨本の内

數町舟にて對岸に到れば、こゝは六田の里とよばれて楢の花の雪と紛ふ芳野への登り口なり。

六田には小さき旅籠屋たゞ一あるのみ、宿りを請ふにいざとて奥の八疊に通されぬ、この家にとりては第一の室と覺しけれ

ど、柱傾き壁破れ、疊黒くして居るに物憂し、運び來れる茶は土臭く、小

皿に盛れる金米糖は角とれて色は濁れり、試みに指もて押すに音なくして

碎けぬ。心待ちにせし夜の膳には、何やらの焼肴

舌もや刺さんと恐れて箸さへつけず、椀には湯婆

箭の汁に、御馳走振にや鶏卵の半は煮へたるを添

えたれど、異なる味に咽喉を通らず、海老の佃

煮、色醜き香のもの、見

渡す限り口にすべきものなきに、況して一人の客に勞を惜みて

にや、飯は暖かき湯氣はあれど、蒸返しにて厭ふべき匂りあるに、いよく恐縮して、例の土臭き茶に助けられて僅かに一椀

を啜りぬ。

風呂は家になく、湯札もちて二三丁先へゆくなりといふに勇氣もうせて、やがて臥床に入るに、夜の具は、その堅さよりいふも重さよりいふも、又その冷やかさよりいふも、恰も石の衾にあるがごとし。今日道連れの入の話に、吉野といふ處は一年の生計を花時十日に取立るが例にて、不當の宿賃を食らるゝのみか、客多き時は屢々謝絶せらるゝともあれば、必ず麓にて泊り給へと言はれしが、この待遇は餘りに情なきに、かくと知らば猶一里を吉野を往きたりしものと悔めども今は詮なし。

硬き木枕にも馴れてやがて眠りに入りしが、耳元近く人聲するに、寤めて聞耳立つれば、三四十人とも覺しく道者連の宿りを求めて押問答せるなり、他に座敷とてなきこの家のさまなれば、やがては吾が室へも割込來ることもやと安き心もなかりしに、幸にも店頭の廣間に押合ひ折重なりて枕につきたる様子なり、さるにてもこの廣き室を一人にて占むるは今更氣の毒にも思はれて、さきの不平は設備の足らぬよりにて、宿の待遇の悪しき故にはあらざりしなど思ひかへしつ。(完)

△ △ △  
浅井忠氏の水彩畫手引に曰く

顔料は左の十四色があれば、之を調合して大抵の色が出来るから、あまり多くの種類は用ひない方がよい。

白 色 イヤイニスホワイト。

赤 色 クリムゾンレーキ、ベルミリオン。

茶褐色 ライトレツド、バアンシンナ、セピア。

黄 色 エルローオーカー、ガンボーヂ。

緑 色 フーカスグリーン。

青藍色 オルトラマリン、インヂゴ、コバルト、プロシア

ンブル。

黒 色 アイボリーブラック。

以 上

又曰く

繪の主眼たるものは形も明瞭に、色彩も豊富に、明暗も著しくかき、其他の部分は、これを引立たせるために、調子を柔げかく、もし畫面全體が同一の調子で出來たならば其繪は雜然として、騒がしく不快なるものになつてしまふから、常に全體の調子に注意して部分を無意味に畫き過ぎて主眼を破さないやうにせねばならぬ。

△ △ △

余の精神をこめて畫作に従事する時と雖も若し乞食ありて其痛傷を包まんことを余に乞ふものあるか、又は盲人ありて余に隣村迄の案内を託する事あれば、余は直ちに余の畫筆を投じ、余の全身全力を盡して余の同胞の求めに應ぜざるべからず。

ニコライ、ガイ